

2019年度人権作文集

# ひかり

第 32 集



大分県立別府支援学校 石垣原校高等部3年 江東良樹さんの作品

公益社団法人大分県人権教育研究協議会

この人権じんけん作文集さくぶんしゅう「ひかり」という名前なまえは、

日本にほん最初さいしよの人権じんけん宣言せんげんと言いわれる水平すいへい社しゃ宣言せんげんの

「人ひとの世よに熱ねつあれ、人間にんげんに光ひかりあれ。」

という言葉ことばからとつたものです。

## まえがき (児童生徒のみなさんへ)

この人権作文集「ひかり」は、県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童生徒のみなさんが、人権について、日々を思っていることや感じていることを作文として書いたものを集めて作りました。

本当にあったことをもとに、おかしいと思ったことや感じたこと、はらが立ったこと、そして、よく知っていること、いろいろなことを書かれています。

筆者の多くは、自分からおかしいと思うことをかえていこうと行動しています。すべてにわからないことでも、おかしいと声を出していいことをわすれてはならないと思います。

また、まわりのなかまからはげまされ、ちまえられたことや、ゆづり気を持つことができたり、安心できたりしたけ

いけんや、なかまとつながることの大切さをつづった作品も多くありました。この作文集を読んだみなさんにもたよるな体けんをしたり、感じたりするところがあると思います。自分と同じ考えだと思ったり、ちがう考えだと思ったりすることもあるのではないのでしょうか。作品の中には、気や先生・おうちのひと、感想を出し合ってほしいと思います。

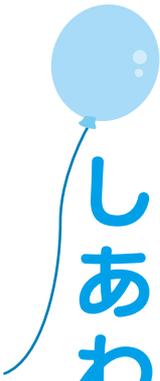
### 先生方へ

大分県人教の出版物では「しょうがい」「なかま」という表記を用いていますが、本書では、できるだけ提出していただいたままの文言で表記するまいにしました。

題名	学校名	学年	なまえ	*視点	ページ
しあわせのバケツ	臼杵市立下北小学校	2	宮崎 禮歩	なかま	1
つながるいのち	津久見市立堅徳小学校	2	戸高 未葵	自分・家族	3
たっちゃんごめんね	宇佐市立院内北部小学校	2	嘉永 貴元	なかま	5
「いっしょに遊ぼう。」って言いたいな	国東市立安岐小学校	3	相部 結月	なかま	7
ずっとなかよしでいるために	九重町立飯田小学校	3	有吉 嶺太郎	自分・家族、なかま	9
差別をなくすとは	豊後高田市立河内小学校	5	早田 蓮	なかま、差別・偏見	11
友だちのピアス	中津市立豊田小学校	5	小池 まり	差別・偏見	13
友だちだからこそ	日出町立日出小学校	5	A・S	なかま	15
気持ちを伝える	玖珠町立森中央小学校	6	梶原 翔太	自分、なかま	17
みんな平等	豊後大野市立朝地小学校	6	安道 咲希	くらし・生きる、差別・偏見	19
仲間の大切さ	臼杵市立福良ヶ丘小学校	6	中山 桔平	なかま	21
「命のコンサート」を聞いて	B市立 小学校	6	Y・R	自分・家族、差別・偏見	23
いじめの恐ろしさ	津久見市立第一中学校	1	F・T	自分・家族	25
さまざまな障がいや病気の人と一緒に暮らすこと	別府市立朝日中学校	1	仲西 理人	差別・偏見	27
優しい世の中へ	日田市立 中学校	2	梶原 彩里	くらし・生きる	29
「あたりまえ」の大切さ	日出町立 中学校	2	匿名	なかま	31
私は差別をしている	宇佐市立駅川中学校	2	矢野 亜依	差別・偏見	33
支える	豊後高田市立高田中学校	3	栗 陽奈代	差別・偏見	35
同じ一人の人間なんだ	竹田市立直入中学校	3	匿名	差別・偏見	37
男女問わず多様な性の人が住みやすい国になるために	宇佐高等学校	1	中村 実夢	差別・偏見	39
「好き」と言いたい、堂々と	中津南高等学校	1	竹本 弘子	差別・偏見	41
画面の向こうの人を傷つけてはいないか	別府鶴見丘高等学校	2	高茂 愛里	くらし・生きる	43
相手の気持ちを考えること	別府鶴見丘高等学校	2	若山 楓	差別・偏見	45
身近な人権	別府鶴見丘高等学校	3	福田 亜理沙	差別・偏見	47

\*視点について

「自分・家族」「なかま」「くらし・生きる」「差別・偏見」の4つの視点で分類しました。



# しあわせのバケツ



白杵市 下北小学校 二年

宮崎 禮歩

「しあわせのバケツ」ってどんなお話だろうと思いました。ぼくは、ずっとむかしから家にあって、ずっとつかわれているバケツと思いました。じじいとかいじいじ、「しあわせそうなバケツ」だからです。でも、ちょっとちがいました。

このお話で一番心にのこったところは、人の大切さです。ぼくは、今までちょっとだけ、友だちのバケツのなかみをなくしたかもしれない。そうするといじいじ、ぼくのバケツもからっぽになったと思いました。ぼくは、友だちにいじわるをしてしまいました。わるぎはなかったけれど、ついてしまいました。その時、友だちのバケツもからっぽになったし、ぼくのバケツも、からっぽになったと気づきました。この本を読んでそのことに気づきました。

だれかをきずつけて、そのだれかのバケツをからっぽにすれば、自分のバケツもからっぽになってしまいます。はんたいに、だれかのバケツをしあわせでいっぱいにするれば、自分のバケツもしあわせでいっぱい

ぼくにならぬさうです。それは、さういふことをしたり、さういふことをされたりした時におきるからです。ぼくは、いふことをしたりされたことがあります。された人は、ぼくのバケツにしあわせをわけてくれて、ぼくにしてくれた人は、ぼくがいっぱいに分けてあげたさういふことになります。

ぼくは、今日、だれのバケツをしあわせでいっぱいにしたか、考えてみました。ぼくは、今日は、今のところ、だれのバケツもいっぱいにしていません。今日は、まだしていませんけど、その先のことを考えていきたいです。もし、こまっている人がいたらたすけてあげたいです。もし、ぼくがこまっていたら、たすけてくれた人に「ありがとう。」を言いたいです。

これからぼくは、友だちのバケツも自分のバケツもいっぱいにするために、人を大切にしたいです。こまっている人がいたら、たすけてあげたいです。





# つながるいのち

津久見市 聖徳小学校 二年

戸高 末葵

わたしのひいおじいちゃんは九十一さいです。ふくおかにひいおばあちゃんと二人ですんでいます。  
ひいおじいちゃんは、すぐ体がやわらかくて、よくストレッチするところを見せてくれます。とても  
元気です。

ひいおじいちゃんは、せんそうしてゐるころ、ぐんたいのしごとで船にのこっていたそうです。  
ある日、ひいおじいちゃんの船がアメリカカブンのぼくだんのつげきでまっふたつにおれてちんぼつし  
てしまいました。

その時、ひいおじいちゃんはいしづまきこまきこまれたけど、生きたいと思つてひっこつてびくまきこまきこ  
でたどりついたそうです。

その話を聞いて、わたしはびきびきしておふとんにもぐりこみました。すげいと思つきました。そしてい  
わくてふしぎな気もちになりました。

ひいおじいちゃんとおひいおばあちゃんがいて、おじいちゃんとおばあちゃんがいて、お父さんとお母さんがいるから、わたしが生まれました。

ひいおじいちゃんが、自分のいのちを一生けんめいまもってくれたから、今のわたしがいるのです。そうやってつながっているんだなあ、と思って何だかホッとしました。

わたしは今、学校で友だちとあそぶのがいちばん好きです。「一番に好きなのは、バレーボールです。チームのみんなはお父さんで、よくちゅういされるけど、もっと上手くなってセッターとして活躍してほしいです。」

今わたしが好きなことにがんばれるのは、ひいおじいちゃんが海でおぼれながらひっしでいのちをまもってくれたからです。だから、わたしもつないでもらいたいのを、ずっと大切にしていきたいです。



# たっちゃんごめんね

宇佐市 院内北部小学校 二年

嘉永 貴元

休み時間に、ぼくは、たっちゃんごめんねの絵を知っているかん字をかきました。たっちゃんもかきました。ぼくは、たっちゃんが字をかいているとき、きたなくみえい、

「たっちゃん、なに。何かわからない。くたぐたぐよ。」

と、いってしまいました。一人でのしくかいたけど、そのあと、たっちゃんは、だまっかいたりました。ぼくは、「ひどいことを言っちゃった。」と思ったけど、あやまらずに外へあそびに行きました。たっちゃんは、一人でいっしょを聞いていました。たっちゃんは、ちよっとなきな顔をしていました。

かえらぬのよきに思ひ出さし、ぼくは、

「ごめんね。」

とたちちゃんにあやまりました。たちちゃんは、

「ううよ。」

と、言ってくれました。でも、たちはまだかなしそうな顔をしていました。

かえりの会がおわって、たちちゃんとういっしょにかえりました。わかれ道のういっしょ、ぼくは、

「たちちゃん、休み時間にういっせーね。」

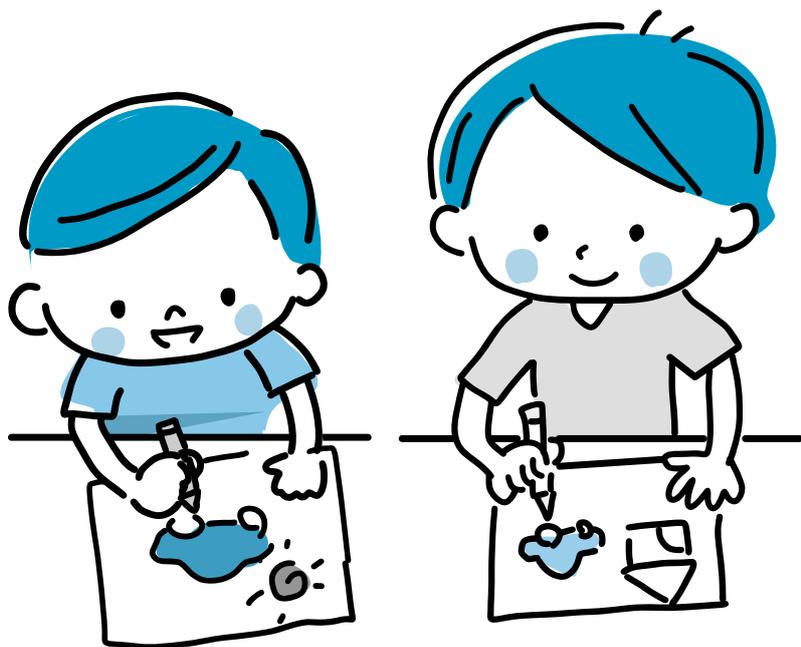
と、またあやまりました。たちは、

「ううよ。」

と言っ、わらいました。たちがわらったから、ぼくはう

れしかったです。

たちちゃん、ほんとうにういっせーね。



# 「いっしょに遊ぼう。」って言いたいな

国東市 安岐小学校 三年

相部 結月

わたしには、言いたいけどなかなか言えない言葉があります。それは、「いっしょに遊ぼう。」といっしょに遊ぶことです。こども園に通っていたときは、いろんな友だちに自分から声をかけることができました。しかし、小学校に入学すると、話したことのない人ばかりで毎日ドキドキしていました。いっしょに遊んでみたい友だちに、今までと同じように「いっしょに遊ぼう。」と話しかけたかったです。でも、「今、話しかけていいのかな。今まで遊んだことがないから、何から話せばいいのかな。友だちになってもうえるのかな。」と考えるしまいました。考え出すとなかなか自分から声をかけることができなくなってしまいました。一年生の時に一度、よなりのせきのふに初めて話しかけてみました。すると、え顔で、「いっしょ。何して遊ぶのがいいかな。」と、聞いてくれました。

「新しい学年になったから、また新しい友だちをつくるチャンスだ。」と思い、声をかけるほうほうを考

えました。それは、もっと周りのみんなのことを知ることです。みんながすきなことは何かな、いつもはどんな遊びをしているのかをよく知ることです。周りにたくさんのお友だちがいる時は、きんちようして話しかけることができないけど、となりの席の子や一人である時なら、声をかけることができそうな気がします。

わたしは、三年生になって発表することがすきになってきました。発表では大きな声で話せるようにがんばっています。大人数の前で発表するとは少しきんちようするけど、お友だちが、

「めづきちちゃん、がんばったね。」

と、声をかけてくれることがあります。お友だちがほめてくれるとゆう気が出ます。「いっしょに遊ぼう。」と言えるようになりたいです。そして、お友だちをふやしていきたいです。きっとできると自分に言いながらがんばります。



# ずっとなかよしいでいるために



九重町 飯田小学校 三年

有吉 嶺太郎

ぼくのクラスは、七人います。ときには、ケンカもするけど、いつもはなかよしいです。それでもぼくは、思いどおりにならなかつたり、友だちに注意されたりするとイラッとして、しゅんえをけつたり、人をつねつたりしていました。なんとか、なおそつとしても、なかなかイライラがおさまりません。

しかし、一学期になり、少しずつそれがへってきたような気がします。その理由として、二つあります。一つめは、イラッとした時どついたらいいのが、先生に教えてもらったからです。先生は、

「教室の外にでるか、スッキリする場所に行ってみて。」

「と、おひるはへいと言いました。それでやってみると、自分ひとりでゆっくり考える時間ができ、スッキリするじつができました。スッキリするじつ、どうしておこってしまったか友だちやみんなにもゆっくり話すじつができて、理解してもらえるのでうれしくなります。自分がよくなかったことを考えるじつもできます。だから、おちついて話すって大切なんだなと気づけました。」

「二つめは、スッキリタイムがあるからです。ぼくのクラスには、スッキリタイムについて、みんなが困ったことやなやみを相談する時間もあつります。」

「ぼくは、○○と言われると、なやな気持ちになるよ。」

と話すよ、みんなはわかってくれます。ほかに友達たちが、きずつくことやかなしくなることも知ることができません。おたがいを知ることができ、だんだんとけんかも少なくなりました。友だちがぼくのことをわかってくれるので、イラッとしてしまうこともへりました。

今、飯田小学校ではスマイルデーに取り組んでいます。そのおかげで、いじめや悪口がなくなっている気がします。今のクラスには、いじめや悪口がありません。それは、お友だちがきずつくかもしれないということも、みんなで気づいて相手に伝えることができるし、なにかあれば七人で話ができます。

そのためぼくは、今、学校に行くのがとっても楽しみです。いつも中休みや昼休みに、だれとなにをしようかなとワクワクします。こんな毎日が学校のみんなにもつづくためにも、そしていつもみんながスマイルでいるためにも、いじめはぜったいにせず、何があってもしっかりあいてとお話をして、かいけつしたり、わかりあったりしていきたいです。これからも毎日がスマイルデーとなるために、がんばります。



# 差別をなくすとは

豊後高田市 河内小学校 五年

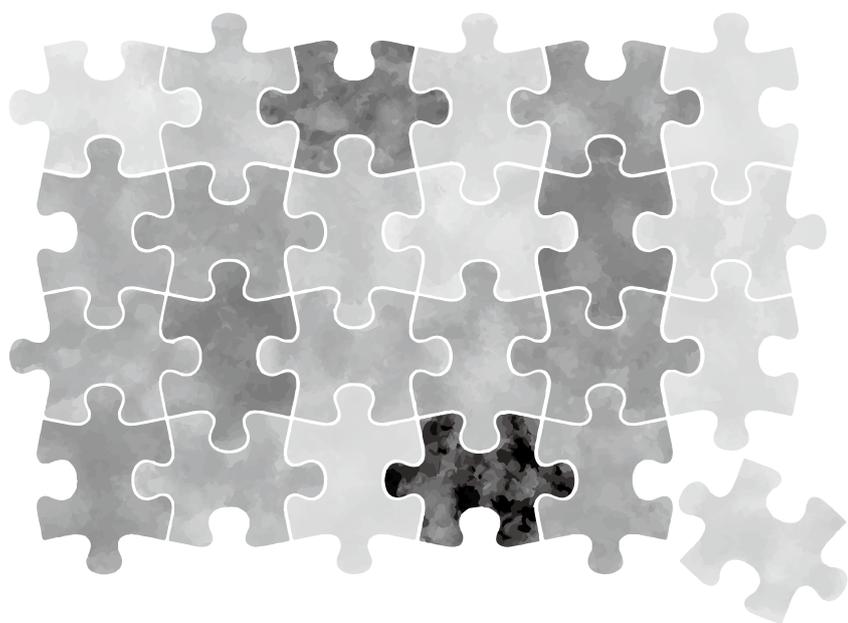
早田 蓮

ぼくは「山の粥」を勉強して、差別する相手に同じようにやり返し怒りで解決しても、差別はなくならないことが分かりました。ぼくはこれまで、「いじめをする人は罰を受けても仕方ない。」と書いていました。でも「山の粥」に出てくる藤べえじいさんは、農民や殿様から差別を受けてくやしい思いをしていたのに、ききんで死に

そんな農民に手紙を出し、山の粥をふるまって命を救いました。ぼくは「何だろう。」と思ったけど、みんなと話して、藤べえじいさんは、命をつなぐこと、目の前で苦しんでいる人の思いに寄りそうこと、いじめをしている相手ともつながることが大切だと分かっていたからだと気づきました。

今年、河内小ではもめごとが増えています。特に四年生が上級生から言いがかりをつけられて、しんどい思いをしています。ぼくたち五年生は「おかしい。」と思って注意することが多かったのですが、相手が余計腹を立てるだけでよくなりませんでした。この学習の後、ぼくは両方の気持ちをゆっくり聞いてみることにしました。

上級生も本当はぼくたちと仲よく遊びたいと思っている  
ことが分かりました。ぼくは友だちにも声をかけて、も  
めごとがあった時、気持ちを聞くことと思いを伝えるこ  
とを続けようと思っています。藤べえじいさんのよう  
に、やさしく仲間とつながり、楽しい学校を自分たちの  
手でつくっていききたいと思いました。



# 友だちのピアス

中津市 豊田小学校 五年

小池 まり

道徳の時間に「外国から来た転校生」の動画を見ました。転校生の子がピアスをしていて、その子になんて伝えるのか、みんなで考えました。「はずすように言おう」という考えと「そのままでもいい」という意見に分かれました。私は迷いました。どうしてかということ、学校では校則でピアスをするのが禁止されているからです。

しかし、転校生が生まれた国では、生まれたときに「生まれすぎてありがとう」という気持ちで耳にピアスをつけるらしいのです。転校生は、ピアスを体の一部のように、いつもつけています。それを無理矢理はずさせるの

は、どう思いますか？私はいやです。

でも、ピアスをつけているのがその転校生一人だったらどうでしょうか？以前、ピアスのことで先生から注意された生徒が、いじめるかもしれません。みんなからは、仲間外れにされるかもしれません。国と国との文化の違いでいじめが起こるのは変です。それは差別の始まりになると思います。人は誤解をすることはあります。ですが、誤解が差別につながるのはおかしいです。差別は人を傷つけます。だから、差別をしたらいけないと私は思います。

私のクラスにも、外国から来た友だちがいます。外国語の時間には、わからない単語を教えてください、誰よりもはやく手を挙げて答えたりするところは、日本人にはまねできない素敵なところだと思います。

私は、迷いながら、いい方法はないかと考えました。「時と場所を考える」という方法です。学校の中ではピアスをはずし、学校が終わったらつけるという考えです。他の方法としては、先生に外国では「生まれすぎてありがとう」という気持ちでピアスをつける風習があると理由

を話してもらい、生徒へ伝えてもらうというものです。みんなも、理由を聞けば納得すると思います。

でも、やっぱり私は迷います。だって、体の一部みたいに大切なピアスは、はずしたくないだろうと思うからです。

国によっていろいろな風習や伝統があります。それをやめさせるのではなく、まずは話をして理解し合うことから始めてみてはどうでしょうか。話し合いをすることで、みんなが納得し、いじめが起ることがなくなると思います。そして、お互いの国の文化や風習がこわれなくなることはないと思います。



# 友だちだからいじめる

日出町 日出小学校 五年

A・S

「いじめはなくせるのか、なくせないのか」についてみんなで考えました。ぼくは、みんなの意見を聞きながら、いじめをしている人をゆるせないと思いました。いじめをやめられないで、続けている人を絶対にゆるせません。だって、学校は大好きな友だちがいて、いっしょに遊んだり勉強したりできる楽しい場所のはずです。なのに、安心して生活できないなんてたえられません。

ぼくは、いじめはされていませんが、悪口を言われることがあります。体が大きいので、体型のことで悪口を言われます。ぼくは、それが本当にいやです。そして、くやしいです。なぜ、ぼくがそんなことを言われなければ

いけないのだとも思います。その悪口を一番最初に言われた時、すごくショックだったのを今でも覚えていますが、でも、相手が仲の良い友だちだから、言い返すことも、「その呼び方はやめて。」ということもできずにいました。その時は、最高の友だちだからこそ反げきをせずに、自分の心にとどめておこうと思っていました。

「やめようと言えたらすっきりするだろうな。」

いやな気持ちが続いていたし、自分の気持ちを伝えた方がいいことはわかっていました。でも、友だちは悪気なく言っているはずだから、ぼくが気持ちを伝えると、反対に友だちを傷つけることになるんじゃないかと考えて、ずっと言えないままでした。いつか悪口を言うのをやめてくれるだろうと思っていましたが、いじめについて授業で考えたり、先生と話したりする中で、ぼくの気持ちも変化してきました。

「このままだと何も解決しない。」

ぼくは、友だちに自分の気持ちをがんばって言うことにしました。しかし、そう決めたものの、直前まで何と伝えたらよいか悩んで、不安な気持ちがふくらんでいき

ました。さらに、相手を前にすると、緊張してどきどきが止まりませんでした。

「だいたい、わかっているはずだ。」

ぼくは、勇気をふりしぼって言いました。

「もう悪口は言わんで。」

友だちは、

「何も考えてなかった。○○くんがそんな気持ちでいることがわからなかった。ごめんね。」

と謝ってくれました。

その言葉を聞いて、ずっしり重たかった心が軽くなりました。「ぼくの気持ちをわかってくれて、ほっとした。やっぱり言ってよかった。」ぼくは、自分の気持ちを言えて、すっきりしました。これからは大切な友だちだからこそ、勇気をもって、素直に自分の気持ちを伝えていきたいと思えます。



# 気持ちを伝える

玖珠町 森中央小学校 六年

梶原 翔太

ぼくは、よくけんかをしていた。友だちの手が当たったとき、なぐられたと思い込みたいて仕返したこともあった。注意をされたときに、

「だまれ。」

といやな言葉で返してしまったこともあった。一年生のころから何度も何度もくり返してきた。しかし、四年生で担任の先生からいいこと悪いことをはっきりと教えてもらい、ぼくもわかるようになった。それから、高学年になるにつれてけんかや暴力が減ってきた。

けんかをした後、時間がたってから話をすると落ち着いて話ができるようになる。その時に、相手にどうしてほしかったのか、何がイヤだったのかを伝えられるよう

になってきた。イヤだったことと、そのときの気持ちを伝えると相手もわかってくれるし、ぼく自身もすっきりする。

どんなにけんかしても、ぼくが間違ったことをすれば、友だちは声をかけてくれる。この間、一緒にふざけたくて、ちよっかいを出したら友だちは困っていた。ばつが悪くなってぼくもすねていやな言葉で返してしまっただ。みんながやさしく注意してくれたけれど、聞くことができなかった。

その後、先生とゆっくり話をした。先生が、

「みんなが心配だからって言って、このことを報告しにきたよ。」

といった。その言葉を聞いたとき、「みんなはぼくを大切に思っているんだ。」ということを感じた。信らいを失っていると思っていたけれど、ちゃんとぼくのことを考えてくれていた。

「遊びたかった。」

と気持ちを伝えると、笑顔で許してくれた。初めから気持ちを伝えたらよかった。

そのあと、みんなのことをぼーっと考えた。休み時間に遊ぶとき、

「遊ぼ。」

という时必须、

「ううよ。」

と言いつくくれる。委員会の仕事を忘れていたら、

「しよこちゃん、委員会の日だよ。」

と声をかけてくれる。行事で劇の役決めのおーディションを受けると、たくさんの人が手を挙げてくれ、やりたいうことになることができた。ふだんのことでは決めず、他の人と同じように評価して、ぼくにチャンスを与えた。けがをした一年生を保健室につれていくと、

「おぼいね。」

と認めてくれる。みんなのやさしさにたくさん助けられている。

だから、これからはみんなを傷つけないようにしたい。たくさんのことを気持ちで伝えたい。みんなと遊びたいときは、

「遊ぼい。」

と素直に声をかける。注意されたときは落ち着いて聞く。けんかではなく、自分の気持ちを言葉で伝えられるようになりたい。そして、みんなと楽しく過ごしたい。友だちの気持ちを大切にしたい。もし、気持ちを伝えられず、困っている人がいたら、

「気持ちを伝えるよいうよ。」

ということを伝えたい。ぼくもたくさんの人を受け入れていこうと思う。



# みんな平等

豊後大野市 朝地小学校 六年

安道 咲希

私は、二学期の授業で「人権」についてたくさん考えてきました。その中でも、一番心に残っている授業は「差別一揆」です。

これは1856年、江戸時代、武士、町人、百姓、むらの人と、人の身分が分かれていた中で一番差別されてきたむらの人のお話です。長い間、住む所などで町人や百姓とは別のあつかいを受け続けていたむらの人々に、はんのお触れが届けられました。その内容は、服は無地でないといけない、他の所に行く時はげたをぬげなど、はつきりと見分けがつくようなとてもひどい内容でした。これが許せなかった良平たちは、出した願いも認めてもらえなかったため、命をかけてうったえ、願いがか

なったお話でした。

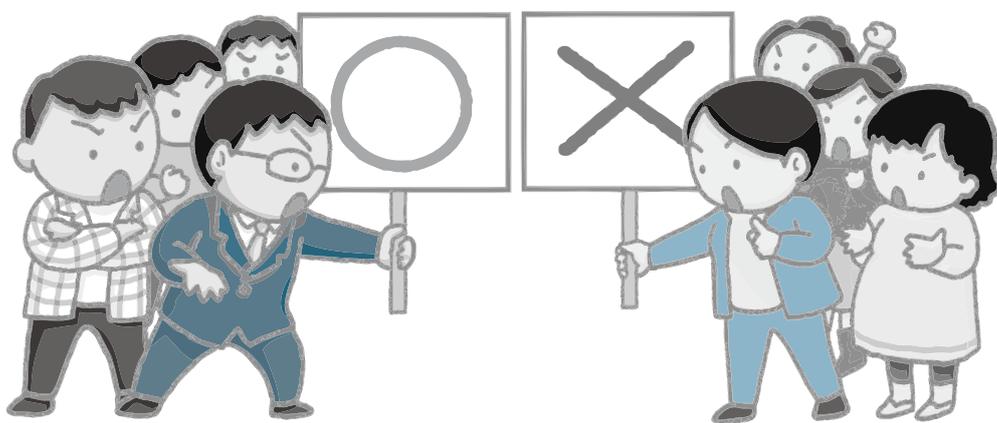
私は、お話の始めの方に出たむらの人々が差別されていることについて、疑問を持ちました。「なんで、いっしょの人間なのに、住む場所、着る服も決められないといけないのか。それにまた、はんのお触れにしたがわれないといけないのか。差別をされてだれもいい気持ちにはならないのに、なぜ続けるのか。」差別され続けているむらの人たちの気持ちになると、いかりの気持ちと悲しみの気持ちになりました。

その後の良平たちの行動は、願いを何度も出し、通らなかつたら「命をかけてでも」という気持ちだったと気づき、自分がむらの人たちの気持ちになっているよりも、もつとつらい思いをかかえていることがわかりました。ほかの勉強でも、このような出来事があったら殺されたり、願いが通らなかつたりしたことがわかりました。

このような授業を通して、私は、差別は絶対にはいけないと思っています。人は、みんな生きているかぎりみんなが平等に生きていないといけないと思うからです。

今も、完全に差別がなくなっているわけではありません。調べてみると、まだ日本には人種差別やハンセン病に対する差別が多く残っています。その人たちの気持ちを考えると、むらの人たちと同じ、「やめてくれ」といういかりと苦しみの気持ちでいっぱいだと思います。私は、そんな人を増やしたくありません。生きる権利を持った人みんな、楽しく人生を生きぬけないといけないと思うからです。

そう強く思えたのは、新しく差別のことについて知ることができたからだと思います。知ると、そこからその人の気持ちを考えることができ、自分がやってはいけないことがわかります。まずは自分から。「人は生きていく限りみんな平等だから、人を分けたりいやなことをしたりしてはいけない」ということを心に思い続けます。そして、みんなが過ごしやすいようにするために、今現在のことをもっと知って、そこから考えることが必要だと思います。



# 仲間の大切さ

白杵市 福良ヶ丘小学校 六年

中山 桔平

ぼくたちの身の回りには、人を傷つける人がたくさんいます。体の傷だけではなく心の傷も同じことです。体や心を傷つけることは悪いことだとほとんどの人が知っているでしょう。それなのになぜ、傷つけてしまう人がいるのでしょうか。ぼくはこの理由について考えてみました。

そして考えついたことは、傷つけられる人だけではなく、傷つけてしまう人も心に傷をもっているのではないかということです。特に、自分の考えや思いを分かってもらえないさびしさで、人を傷つけてしまうのではないかと思うのです。

そのような考えにたどりついたのは、次のような自分

の経験からです。

ぼくが体も心もつかれているとき、そのつかれていることをわかってくれずに指示をされたり、命令されたりすることがありました。そのときはとてもいやな気持ちになり、悲しくくやしくなったことを覚えています。つかれていることを相手に伝えることが大事だとは思いますが、そのような気持ちにさえなれずに、伝えることをあきらめてしまいました。それだけ、わかってもらえないことはつらいことだとわかりました。

また、ぼくが四年生の時のことです。クラスの友だちが教室で暴れていて、お互いに傷つけあう言葉を言い合ったり、暴力をしたりしていました。ぼくはその友だちがなぜそのような傷つけ合いをするのか、何となくわかっていました。自分の気持ちをわかってもらえないやせるなさで暴れていたのだと思います。だれもわかってくれない孤独感から、友だちの行動はエスカレートしていきました。

そのときのことを考えて今思うことは、「なぜあのとき、友だちの気持ちをわかっていなかったのに、知らんぷりを

したのか。」という事です。もし、ぼくがその友だちの理解者になってあげられていたら、あんなに人を傷つけさせなくてよかったかもしれないと思います。傷つけられた人の心の傷も悲しみも、もっとわかってあげることが必要だったと思います。

このような経験を通して、ぼくは日頃からいろんな立場の人の気持ちをわかってあげたいと思うようになりました。人は孤独だと生きてゆくのが難しくなります。だから一人でも必ず気持ちを理解してくれる仲間が必要です。仲間がいていつもわかってくれる人がいると思えば、人は他人を傷つけようとは思わないはずです。悲しみを乗り越えられる力をもてると信じています。



# 「命のコンサート」 を聞いて

B市 小学校 六年

Y・R

この前学校で「命のコンサート」を聞きました。一番に残ったのは、Uさんが自分の受けたいじめのことを話してくれたことです。Uさんの話を聞いて、何年か前に自分も同じ事を考えていたことを思い出したからです。

私には、学校で嫌な思いをしていた時期があります。友だちに話しかけても無視をされたり、嫌な事を言われたりして学校が全然楽しくありませんでした。毎日「学校に行きたくない。」と思っていました。けれど、学校を休むともっと嫌な事を言われるんじゃないかと思って

休みませんでした。Uさんと同じように嫌な事を言われているそのタイミングで倒れたら、相手も自分が悪いことをしたと気付くんじゃないか等考えていました。

私には仲のいい友だちが二人いました。その子たちと遊んでいるときは、嫌な事を忘れる事ができました。でもその子たちにも自分の嫌な事は話しませんでした。なぜか「話すと負け」と思い込んでいました。

そんな私に親戚のお姉ちゃんが気付いてくれました。よく会って遊んでくれるお姉ちゃんです。ある日お姉ちゃんの家遊びに行った時、

「Rちゃん、困っていることがあるんじゃない？」  
と言われました。私はとてもびっくりしたけど、それまであったことを話しました。お姉ちゃんは、  
「つらかったんだね。頑張っていたんだね。」

と優しく言ってくれました。私は、泣きながら全部話しました。帰ってからお母さんにも全部話しました。お母さんは黙って話を聞いてくれました。話したら心配かけると思っていたけど、話して良かったなとホッとしました。

最近は、そんなこともなくなり良かったと思います。

時々、いじめが原因で命を落とす人のニュースを聞くことがあります。とてもかわいそうです。

「親や友だちに相談ができなかったのかな。本当につらかったんだな。」と考えてしまいます。

私は、来年中学生になります。「新しい友だちをつくりたいな。」と、とても楽しみな気持ちもありますが、「先輩ってこわいのかな?どんな人たちがいるのかな?」等不安もいっぱいあります。けれど、前の自分みたいに一人で抱え込まないようにしようと思っています。思ったことや考えたことなどを親や友だちに相談しながら、楽しい中学生を送りたいと思っています。





津久見市 第一中学校 一年

F・T

「荷物を持たんと殺すぞ。」

そう言われたのは小学校の時です。僕は初めて「殺すぞ」と言われたことを今でもはっきりと覚えています。「殺す」という言葉に傷ついたというよりも、恐怖を感じました。まだ小学生だった僕は、「殺される」、「怖い」といった感情から、その人の荷物を持ちました。その日から学級会が終わって先生がいなくなると、

「荷物を持って。持たんと殺すぞ。」

と言われ続けました。そこから毎日、その人の荷物を持って、言われた場所へ荷物を運ぶことが普通のようになっていました。

すると、今度は、

「俺より早く進むな。」

と言われだしました。また、自分で遠くに投げたボールを、

「あのボールを取っていい。取ってこんと殺すぞ。」

と、どんどん命令が激しくなっていました。僕は今までその人のことを友人だと思っていました。なぜ急にこんなことになったのか訳が分かりませんでした。毎日のように命令され、僕はとても嫌な気持ちでした。それまで楽しかった学校生活は地獄のような学校生活になりました。

命令されるときはいつも嫌な気持ちや、怖いといった感情が強かったけれど、悲しくなる時もありました。毎日、僕が命令されて従っているのを見ているクラスメイトがいました。が、止めてくれる人はいませんでした。しかし、何も言ってくれないクラスメイトたちに対して怒りの感情はなく、「仕方ないな。」と思っていました。きつと止めたら自分も同じことをされる。それが怖いから止められないのだろうなと、あきらめもありました。でも、僕は誰かに助けてもらいたかったし、声をかけてほしかったです。とても悲しく、苦しかったことを覚えていきます。

僕は今までであったことを父と母に相談しました。父と母に心配かけたくないという気持ちと、恥ずかしいとい

う気持ちで、なかなか相談することができませんでした。それに、相談したら告げ口をしたと、またいじめが激しくなっていくんじゃないかという恐怖もあって言えませんでした。それに、あの時は「明日になったらもう命令されなくなるんじゃないか。」「明日になったらもういじめられないで、前みたいに仲良くしてくれるんじゃないか。」「と甘く考えていました。しかし、命令は激しくなっていく、耐えきれず父と母に相談しました。僕が相談したのは「殺す」と言われてから約3ヶ月経ったころです。「本当は誰にも言わずに逃げ出したい。」と思ったこともありました。「自分ががまんしていればいいんだ。」とも思いました。

相談することはとても勇気が必要です。相談できなくて、一人で悩んで耐えきれず自ら命を絶つという選択をしてしまう人もいます。いじめで自殺する人が後を絶たないのは、気づいてあげられないからだと思います。僕は、友人や先生に目で「助けてほしい。」と訴えました。でもそれに気づくことは難しく、誰も気づいてくれませんでした。それでも、その少しの変化に気づいてあげないと、このいじめの問題はこれからもなくならないと思います。

僕の母は看護師の仕事をしています。入院している患

者さんの多くは寝たきりの患者さんだそうです。母は、「私たちは患者さんの少しの変化に気づいてあげなければいけない。それを見逃すと命取りになる。」

と言っています。「いじめも同じだ。」と思いました。口数が少なかったり、ぼーっとしていたり、いつもと少し様子が違えば「何かあったのかな。」と思うことが大切だと思います。いじめではなく他のことで悩んでいるかもしれない。本人に聞いても「何でもないよ。」と言うかもしれません。でも、本当はいじめがあり、気づいてほしいのかもしれない。僕はそうでした。

僕は人の気持ちを読み取ることは苦手です。言われたことをそのまま受け止めるタイプです。だから友人の変化に気づくことは難しいことですが、もし、友人が辛い思いをしているなら、気がついて助けたいと思います。

僕はこの体験でいじめの恐ろしさを知りました。悲しく、辛かったあのような体験を繰り返さないように、僕は絶対に傍観者になりたくありません。「見ているだけで助けない人は、いじめていると同じだ。」と思うからです。「自分がされて嫌なことは相手にもしない。相手のことを考えて、人として恥ずかしくない行動や発言をしていきたい。」と思います。

# さまざまな障がいや病気 の人と一緒に暮らすこと

別府市 朝日中学校 一年

仲西 理人

僕は、小さいころから上手く発声できない音がありました。だから、話す時もゆっくりになってしまったり、普通に話しているつもりでも、

「今、何て言った？もう一度言って。」と聞き返されることがとても多かったです。中学生になった現在でもあります。

大分に引っ越して来る前に通っていた学童では、特に発音のことをからかわれることが多かったです。学童で上の学年の人からかわれたら怖くて言い返すこともできなくて、とてもつらくてイライラしていたことを覚えています。

その頃、発音を良くするために言葉の教室に五年間通

いました。母が毎週金曜日に仕事を早退して、言葉の教室に連れて行ってくれました。当時は、「めんどくさいなあ、行きたくないなあ。」という気持ちも正直ありました。でも今は、「連れて行ってくれてありがとう。」という感謝の気持ちに変わっています。

言葉の教室では、口の筋肉を鍛えるために口に水を含んで飛ばしたり、舌の上に木のスプーンを置いて舌の動きを確認したりしました。様々な訓練はとても大変でしたが、本当にこれで上手くしゃべれるようになるのかなあと不安になったけれど、他の学校からも訓練に通ってくる仲間がたくさんいたことや、教室の先生が優しく協力して指導してくれたことによって、何とか続けることができたのだと思います。

今でも、みんなの前で発表する時は緊張して口が動かずに、うまく伝えられないことがあります。でも周りには意地悪くからかうような人はほとんどいないし、一緒に登校したり遊んだりする友だちは、僕のことを受け入れてくれている人が多いので安心してしています。

言葉をうまく発音することができないというのは、見た目ではわかりません。世の中には、僕のように見た目ではわからない障がいや、病気がある人がたくさんいます。例えば、聴覚障がいの方は、災害が起こった時に、

放送が聞こえなくて避難が遅れてしまうことがあるかもしれない。誰かの助けが必要です。また、内臓の病気等で、電車やバスで長い時間立っていることができない人もいると聞いたこともあります。優先席に座っていると、白い目でじろじろと見られて、悲しくなってしまうそうです。

「僕たちは、このような場合は、どうすれば良いのかな。」と思い、パン「ン」で調べてみました。すると、「ヘルプカード」というものがあることを知りました。カードの表面には、「あなたの手助けが必要です。ヘルプカード」と表示があります。裏面には、手伝って欲しいことを書いておきます。「話せないのどこに電話をかけて下さい」「聞こえないので筆談をお願いします」「席に座らせて下さい」などです。そして困った時にそのカードを見せてお手伝いを依頼します。このヘルプカードを使いたい人は、役所などで受け取ることができません。

そして、どんな人でも安心して暮らしやすい地域にするにはどうすれば良いのかなと考えました。まずは自分の周りにどんな人が暮らしているのか把握しておけば、災害などが起こった時にすぐお手伝いできるかなと思いました。そのためには、きちんと近所の人にあいさつをして会話もして、地区の行事などにたくさん参加した方

が良いのかなと思いました。以前、よく行事などの手伝いに出っていた母は、

「なんでそんなのに行くの？めんどくさくないの？やらなくていいよ、行かなくていいよー！」

と言ってしまったことがあります。でも母は、

「あなたに何かあったら周りの人に助けてもらいたいし、助け合いたいから。」

と話していて、「そうだったんだなあ。」と新たに気が付いたこともありました。

もし今、誰かが嫌な思いをしているのを見かけたら、すぐに行動に移すことはできるかなと考えました。「緊張して、すぐには行動できないかもしれない。」とためらってしまいます。でも、何度もやっていけば自然にできるようになると思っています。

世の中には、いろいろな障がいや病気があって困っている人がたくさんいる、ということのを忘れないようにして、自分自身も困ったら周りに助けを求める勇氣を持ち、助け合いの輪を広げていきたいと思えます。



# 優しい世の中へ



日田市 中学校 二年

梶原 彩里

車イスの人が主人公のドラマを見ていて、「おかしいなあ」と感じる場面が三つありました。

一つめは、車イスの人に歩きスマホをしている人がぶつかった場面です。車イスの人は謝ったのに、歩きスマホをしていた人は「危ないな」と言って、車イスの人をにらみつけて、また再びスマホを見ながら歩いていきました。歩きスマホの人が絶対に悪いと思いました。スマホばかりを見て歩いてみると、周りの状況がわからないので本人も危ないし、誰かに大きなケガをさせてしまう危険性もあるからです。

二つめは、飲食店で車イスの人がお酒を飲んでいる人とケンカになってしまった場面です。お酒を飲んでいる人は「車イスが邪魔」と言っていました。少し邪魔だと思ふこともあるかもしれないけど、車イスに乗っている

人にとっては、車イスが自分の足でもあるしイスでもあるから、そこは相手のことを考えて、何も言わずに理解してほしいです。

三つめは、施設にエレベーターがなかった場面です。その施設には階段しかなかったので、車イスの人は自由に上の階に行くことができませんでした。健常者だけでなく、誰でも自分で上の階に行けるようにエレベーターやスロープをつけ、バリアフリーにすることが大切だと思います。

四年前、私の祖父が病気で体が不自由になりました。脳の病気で、車の運転ができなくなり、一人で歩くことも難しくなりました。そこで、車イスを使って生活することになりました。祖父が車イスを使う生活になったことで、どうしたら祖父が生活しやすくなるかと家族で話し合い、専門の人に頼んで家に来てもらい、家をリフォームしました。手すりをつけたり、お風呂にすべらないタイルをつけたりしました。他にも、家族で協力して、祖父を車イスからベッドに移動させたり、お風呂に入れたりしました。

家族皆で買い物に行ったとき、車イスマークのところを車を止めたことがあります。スペースが広くて、お店



の出入口に近いので、車イスの祖父はとても喜んでいて、快適に利用できました。お店の思いやりだと思えました。祖父が病気になってから、つらいことや大変なこと、心配なことが色々あったけど、家族の絆が強くなりました。今まで、当たり前だと思っていたことが、とても大切なことだったと気づきました。そして、人の優しさに気づき、知らなかったことを学ぶことができました。

私は皆が人を思いやる気持ちを持ち、皆が助け合うことのできる世界にしたいと思いました。私が困ったことやきついことがあった時、友だちや先生、そして家族が私を助けまし、支えてくれます。とてもうれしいです。健常者と障がいのある人も支えあうことが大切だと思います。ドラマの歩きスマホと飲食店での話も、相手を思いやる気持ちがあれば歩きスマホをしたり、「車イスが邪魔」だと言ったりしないようにできると思っています。また、施設やお店にもエレベーターや車イスマークの駐車場、バリアフリーがあれば、助かる人も多いと思います。母からよく言われる言葉があります。「人は一人では生きていけないので、支えあうことが大切」「優しさに勝つ強さはない」という言葉です。人は一人ではできないことがあったり、知らないところがあったりするか

ら、一人ではなくて皆がいるのだと思います。

「人権」とは何かインターネットで調べてみました。人権とは、「人間が人間らしく生きていく権利」で、「すべての人が生まれたときから平等に持っている権利」とありました。また、「すべての人が生命と自由を確保し、幸福を追求する権利」とも書いてありました。少し難しいですが、簡単に言うと、「命を大切にすること」と「皆で仲良くすること」と言えるのではないかと思います。

今後、困っている人や苦しんでいる人がいたら、「私だったらどうしてほしいかな」と考え、それを行動に移せる人になりたいです。行動に移す前に、頭の中でどうしようかと迷ったり、何と声をかけようかと考えたりしますが、それを行動に移せるように勇気を出したいと思います。勇気を出せるかどうかが一番大切なところかもしれません。まずは自分から行動していきます。

相手を思いやる気持ちがあると、その人やその人の周りの人たちは、優しい気持ちでいっぱいになると思います。そうすれば、皆が暮らしやすい優しい世の中になると思います。皆の一人ひとりの優しさに、この世の中を変える力があると信じています。



# 「あたりまえ」の大切さ

日出町 中学校 二年

匿名

私は、人権と自分とはあまり関わりのないものだと思っていました。この人権作文を書くにあたって、どんなことを書けばいいのかわからなくて悩みました。だから、人権とは何か調べてみることにしました。すると、「人権とは、人種や民族、性別を超えて、誰にでも認められる権利であり、私たちが幸せに生きるためのもの」と書いてありました。そこで、その権利とは具体的にどんなものがあるのか私なりに考えてみました。

私は、一年生の夏頃に体調を崩して学校に行けない日が続きました。小学校ではそんなことなかったし、中学校では勉強も部活も大変なので、休んでしまうことに焦りを覚えていました。だから、せめて少しでもと五・六時間目に行くことがありました。すると、同級生の友だちが、

「もう六時間目で。来ても意味ないやん。休めばよかったやん。」

と言ってきました。一人だけじゃなく、同じようなことを何人かに言われました。今考えると、その友だちに全然悪気はなかったと思うし、私も逆の立場だったら言っていたかもしれません。だけど、その時の私は、無理して学校に来た努力を否定されたように感じてしまいました。友だちに会うのが怖くなってしまいました。その後、私は保健室で過ごすようになりました。

今まで保育園、幼稚園、小学校と当たり前のように毎日友だちと会って話して笑って過ごしてきたので、みんなと会わない日々はとても寂しかったです。だけど、会ったらまた傷つけられるんじゃないかと思うと、怖くて会うことができませんでした。

夏休みに入って、しばらく休んでいた部活を再開しました。すると、学校で違う部活の男子と会いました。私は、何か思われるんじゃないか、何か言われるんじゃないかと、とても怖い気持ちでした。だけど、近づくと前と何も変わららず、

「おはようー」  
と挨拶してくれました。私は、少し驚いたけど、とても嬉しい気持ちになりました。その男子や他の友だちも

会えばいつも挨拶をしてくれたり、授業のことを教えてくれたりしました。今まで当たり前と思っていたことも、とても嬉しく感じられました。

それからしばらくして、冬になっても私は、まだ保健室での生活を続けていました。それまで、部活だけはしっかり行こうと心に決めて頑張っていました。その頃は部活も嫌だなと思うことがありました。一人でいるとき、「今日は部活休もうかな」と思ってしまふことが何度もあったけど、部活の時間になると、同じ部活の友だちが保健室に迎えにきてくれました。すると、話したいことが見つかって不思議と部活に行きたくなりました。それでも行きたくないと思う日も、待ってくれたり話を聞いてくれたりしました。部活で嫌なことがあっても、みんなと話して笑い合っていると、自然と部活に行きたいと思えるようになるのです。そして今は、部活が大好きになりました。

二年生となり、私は教室へ行けるようになりました。初めは不安もあったけど、みんなずっと一緒にいたかのように接してくれました。授業中も休み時間も、いつも笑顔のあふれているあの空間が大好きです。きつくて休もうかなと思う日も、「みんなと何かの授業を一緒にしたいな」とか、「何か話をしたいな」という思いが「行

くか！」という気持ちに変えてくれます。一人で過ごした時間のおかげで、改めて友だちの大切さに気づかされました。私が一人で過ごしたと思っていた時間も、振り返るとたくさん友だちが支えてくれていたんだと思います。だけど、やっぱりクラスのみんなと過ごす今の方が何倍も楽しいです。

だから、私の考える幸せに生きるための権利は「毎日、友だちと勉強したり、遊んだりする日々が当たり前になること」だと思いました。よく人権問題として取り上げられる差別問題やいじめ問題などと比べると、小さなことかもしれません。だけど、そんな小さな当たり前のことで、無ければとても大きなことになると思います。今、そんな当たり前の権利が忘れられて、寂しく辛い思いをしている人が全国、世界にたくさんいると思います。私には、最初から当たり前が用意されていて、みんなが待っていてくれました。だけど、今どこかで寂しく辛い思いをしている人は誰かが動かないと何も変わらないうままです。そんな人たちが少しでも減るように私にできることがあれば、小さなことからでもしていきたいです。そして、私を支えてくれたみんなへの感謝の気持ちとして、誰かが困っていたら、すぐに手をさしのべられる存在になりたいと思います。



# 私は差別をしている

宇佐市 駅川中学校 二年

矢野 亜依

「ハンセン病を考えることは人間を考えること。」私はハンセン病について考えていく中で、今の自分、そしてこれからの自分の在り方を見直していきたい。

「ハンセン病」——それは私にとって聞きなれない言葉だった。聞きなれないということは、珍しく、治りにくく、そして恐ろしい病気なのかなという印象を持った。最近テレビで観たエボラウイルスのように。そんな私がハンセン病に興味を持つようになったのは、ある日の新聞の見出しがきっかけだった。『失われたきずな取り戻したい』ハンセン病、隔離政策から生まれた偏見。なぜ、一つの病気から差別や偏見が生まれ、きずなが壊れてしまったのか、私の頭の中に疑問が生まれた。

ハンセン病とは、「らい菌」という細菌によって、皮膚や神経がおかされる感染症だ。かつては「らい病」と

呼ばれ、「治らない病気」といわれてきたが、薬が開発され治る病気になり、今では日本で発症する人はほとんどいない。しかし、日本ではハンセン病患者を強制的に療養所に入所させる「隔離政策」がとられていた。本来は感染力の弱い病気なのに、強制的に入所させたことや、患者の家を薬で真っ白になるまで消毒したことなどから「ハンセン病は恐ろしい病気」というイメージが植え付けられた。国は裁判でその責任を認め、総理大臣は元患者たちに謝罪した。

なぜ国は隔離政策をとり、患者を差別したのだろうか。国が隔離政策をとったせいで、多くの人々がハンセン病のことを誤解し、偏見が生まれた。でも、もし私がハンセン病のことを何も知らずに国がしたことだけを聞いたら、きっと私もハンセン病は恐ろしいと誤解してしまうと思う。ただうわさだけで判断してしまうと、差別や偏見が生まれてしまう。

国が政策の過ちを認めるのにこんなにも長い年月がかかったのはなぜだろうか。WHO（世界保健機関）が隔離政策を否定したのは1960年であるのに対し、国が政策を廃止したのは1996年だった。また、当時の最高裁は感染の可能性を理由に裁判は非公開で行われていたそうだ。つまり、行政と司法と世論のすべてが差別を

認めていたことになるのではないだろうか。私の中に怒りがわいてきた。いったいハンセン病にかかった人たちは何か悪いことをしたのだろうか。長い間療養所に強制隔離され、周りから恐ろしい病気と差別され続け、国も助けてくれない。それどころか今も500人以上の人がまだ施設での暮らしを余儀なくされている。この人たちの人生はいつたい誰が償ってくれるのだろうか。

無知が偏見につながり、そこから差別が生まれること。ハンセン病は国だけの問題だろうか。

「〇〇ちゃんが△△さんの悪口言っちゃったよ。」

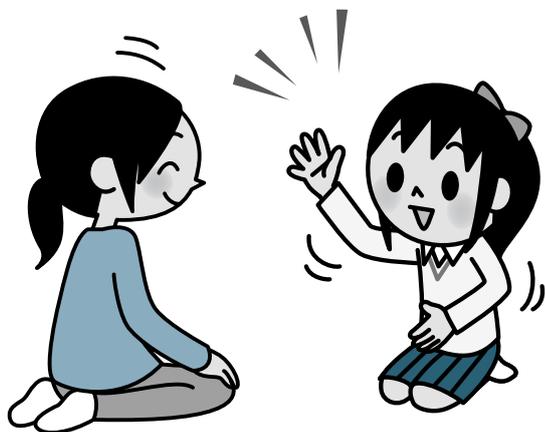
「□□さんが〇〇ちゃんのこと嫌ってるって知ってた?」

など、日々周りから聞こえてくるうわさ。そうなんだと思うことや納得してしまうこともある。そこには相手のことを考えず一方的な情報をそのまま信じてしまう私がいる。つまり、私の日常の中に、あの人はこうという人だ、あの人が悪いという偏見が生まれているのではないだろうか。そういう偏見の積み重ね、みんながしているからいいという思い込みが差別を生むのである。ハンセン病がそうであったように。そう考えると私は差別をしているのかもしれない。相手が悪いからと決めつけ、自分を正当化していた。どんな理由があれ、差別は絶対にして

はいけないのに。

私は差別はしたくないし、自分はしていないつもりだった。しかし、ハンセン病について考えていく中で、まず事実を知ろうとすること、そしてうわさではなく相手の気持ちを知る大切さを感じた。ハンセン病は国だけの責任なのだろうか。今まで何も知らずに何も行動してこなかった私たち一人一人が差別を許し、差別を広げてしまったのではないだろうか。人間は差別をしてしまう。しかし、時に自分を振り返り事実をもとに考えることで、一歩ずつ前に進んでいくのではないだろうか。私は差別をしている。ハンセン病について考えていく中で気づかされたこと

だ。これから、偏見を持たず今のその人を見つめ、まず相手のことを考えられる人になりたい。苦しんでいる人、悲しんでいる人に寄りそい、一緒に涙し、一緒に笑える人になりたい。そして差別に気づき、怒りを持ち、差別をなくす努力のできる人になりたい。





豊後高田市 高田中学校 三年

栗 陽奈代

「大丈夫、できるよ、自分を信じて。」

この言葉は、私が二年前、先輩からかけてもらった言葉だ。そのとき、私は、竹田市で行われた県駅伝大会の中継所にいた。タスキをもらう前の緊張感といったら、言葉では言いあらわせないほどだ。そんな不安を抱えた私に先輩は力強く言ってくれた。すると、それまでの不安な気持ちが少しずつ和らいでいくのを感じた。たった一言の言葉が、人を救うことがあるんだと感じた出来事だった。心からの言葉は人を支える。そして、それは今でも私の心の温かい部分に収められている。

先日、私は貴重な体験をした。県の駅伝大会に参加して「支えること」とはどんなことかに気づかされたからだ。

私の役割は、選手のサポート。選手が最高の走りができるよう、レースに集中できるように動いていた。レースの前の日、チームのメンバーから、

「今日ここに来てくれてありがとう。サポートをしてくれてっれっ。」

と言われた。私は、二年前に先輩がしてくれたことをただけなのに。このとき、胸がぐっと押さえつけられるような感じになった。

私は、九月にいったん部活を引退した。選手として走っていたころ、確かに私は、一秒でも速く走る、限界に挑む、そんな気持ちで走っていた。その感覚は忘れてない。でも、苦しい練習も、走った後に感じる心地よい風も、今は私から遠ざかっている。うまくいったこと、いかなかったこと、全部ひっくりかえって、「部活の思い出」というパッケージには入りきれない思い。そんなヒリヒリした、それでいて温かい思いが、体中を巡った。

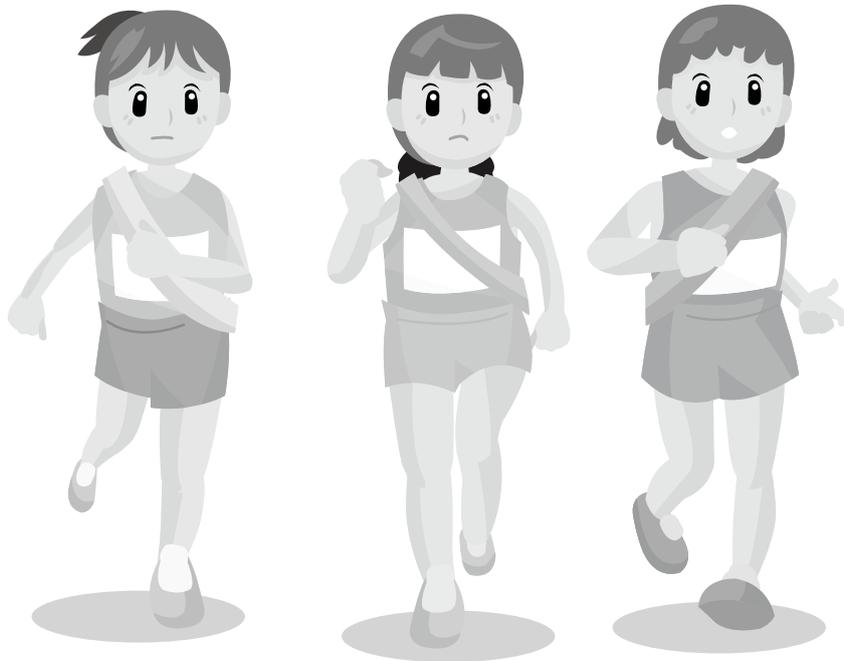
私は、メンバーを支えているつもりだったけれど、実は、私が支えられていたのかもしれない。

支えるということについて考えさせられたもう一つの例がある。それはラグビーのワールドカップだ。試合が始まる前、外国から来る選手やお客さんをもてなそうと、私たちは英語で葉書にメッセージを書いた。

ワールドカップが始まると、タトゥーを入れている人や黒人の人がやってきた。私は、パワーあふれるラグビー選手や観光客の人たちに圧倒された。と同時に、少し抵抗を感じた。怖いなと思った。タトゥーを入れている人や黒人の人は暴力的だから怖いという思い込みだ。実際に外国の方々と話をしてみたら、怖くもなんともないかもしれないのに。このような勝手な思い込み、心のクセを私たちは持っているのではないかと気づいたのだった。

私たちの毎日は、人と人のつながりの中で成り立っている。そのつながりは、「支えること」「支えられること」できている。

一言で、私が救われたように、私も、さりげなく人を支えられるようになりたい。



# 同じ一人の人間なんだ

竹田市 直入中学校 三年

匿名

みなさんはハンセン病という病気を知っていますか。ハンセン病とは「らい菌」に感染することで起る病気です。感染すると、手足などの末梢神経が麻痺し、汗が出なくなったり、痛い、熱い、冷たいといった感覚がなくなることもあり、皮膚にさまざまな病的な変化が起こったりします。また治療法がない時代は、体の一部が変形するといった後遺症が残ることがありました。みなさんはこれを初めて聞いたときにとどのよう感じますか、そしてどう考えますか。僕は授業で勉強する前は差別や偏見の目で見ていました。でも、ハンセン病のことについて学んでいくうちに、自分の心の中で何かが動き出した気がしました。

僕は、ハンセン病の時代背景から学んでいきました。

ハンセン病問題の一つとして差別や偏見というものがあります。ハンセン病の差別のはじまりは中世から近世にかけての間だといわれています。僕はこんなに昔から差別が起こっていると知ったときにとてもショックでした。ハンセン病に感染した人たちも病気になりたくてなったわけではないのにと思いました。

そして、この病気の一の問題は、患者の隔離政策が起きてしまったことです。この政策は、「ハンセン病絶滅政策」といって、ハンセン病患者を強制的に收容し、人里離れた療養所から一生出られないようにするというものでした。このことを聞いて僕はなぜ、隔離までしなくてはいけないのかと疑問に思いました。それは、やはり人々の間での差別や偏見といったものが関係しているのだと気がつきました。そして僕は、ハンセン病という病気についてもっと詳しく調べることになりました。すると、ハンセン病は感染症だけど、とてもうつりにくい病気だということがわかりました。それは、「らい菌」は感染力が弱く、ハンセン病になることはほとんどないということです。このことを知ってよかったと思えました。そして今ではハンセン病によく効くと報告された

「プロミン」という薬が広く使用されるようになり、ハンセン病患者も、どんどん治っていきました。でも、人々の差別は消えることはありませんでした。ハンセン病患者の隔離をやめなかったのです。そのことを知って、僕は、「なぜ病気が治っている人もいるのに、人々の差別や偏見のために隔離されなくてはいけないんだ。」とつい声をあげてしまいました。僕の怒りなんかよりもっともっと隔離されている人たちの思いは強いものだとその時に思いました。もし自分が隔離されたら、自分の家族が隔離され、一生会うことのできない生活が訪れたらと自分の中で、とても考えさせられました。

そして僕が一番感じたことは、差別を受けた人たちの心の傷はそう簡単に治すことのできない深い傷になっているのだということでした。でも、入所者や社会復帰者、その家族に対する差別や偏見は今でも根強く残っているのが現状なのです。だから今、自分たちにできることはないかと考えました。差別や偏見をなくすためにはどうすればいいのか、人権が尊重される社会を実現するにはどうすればいいのか、深く深く考え、考えた分だけ多くの人たちが笑顔になる社会をつくっていかたいと思

います。

僕はこのハンセン病という病気について学んで、ハンセン病に対する差別や偏見をなくすためにハンセン病について正しい知識を持つことや、ハンセン病問題についてもっと深く考えてほしいと思いました。

そして、長い間苦しみにたえてきた人たちを支えてほしいし、ハンセン病問題を風化させてはいけないし、「ハンセン病問題を解決するための力ギは、今を生きる僕たちが握っている。だから差別や偏見を受けていた人でもう亡くなってしまった人たちの思いも胸に、日本中に、世界中にハンセン病はこわくないんだ、差別や偏見で人を傷つけてはいけないんだ」と伝えていってほしいし、僕自身も伝えていきたいと思いました。一人ひとりの個性や特徴も受け入れることのできる国づくりができることいいと思います。

だから、僕も学校生活の中でも、差別や偏見の目で見ている友達たちともこの勉強を通して仲良く、みんなが楽しいと思えるような学校を一人の人間として創っていきたいと思っています。

# 男女問わず多様な性の人が 住みやすい国になるために

宇佐高等学校 一年

中村 実夢

私は髪の毛を切ってからよく男性に間違われる。女だから女の子らしくしなければいけないなどのルールはない。小学校の頃、男子と一緒にチームでサッカーをしていて、髪の毛が邪魔になって切ってしまった。そのせいで家族で遊びに行ったときなど、知らない店員さんに「お兄ちゃん」と呼ばれることがあった。その場では笑って女だと訂正していたけど、正直すごくいやだった。そのことがあって、私は髪の毛をのばそうと決めてのばしていた。しかし、高校生になってネットでボーイッシュな女子を見つけて、とても憧れるようになった。そして、その人の投稿に「どんな髪型にしようか個人の自由」「女

だからって女の子らしくする必要はない」と書かれていた。それを見て私はもう一度髪の毛を切った。一部の人には、

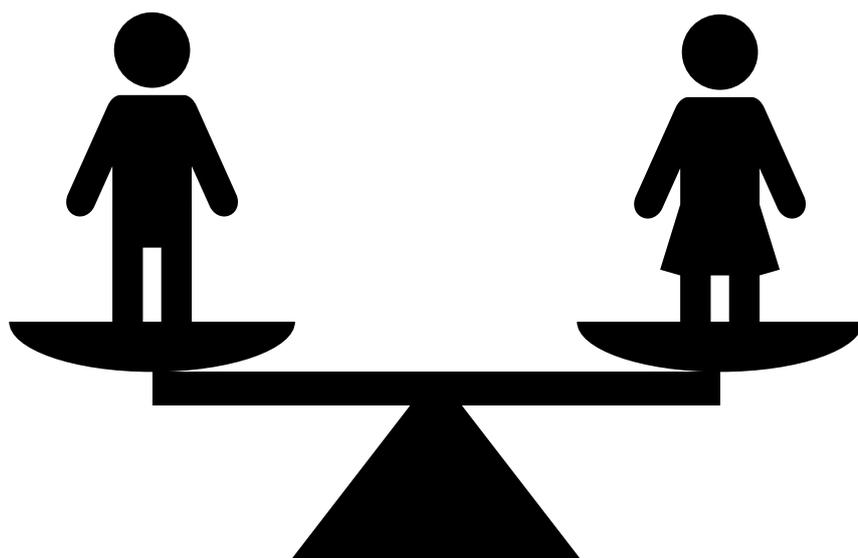
「女子なんだから髪の毛をのばした方がいい」

などと言われる。私はそれを、男女差別ではないかと思うようになった。

私は今でも女子トイレや女湯に入りにくい。男の子と間違えられて、「男の子はこっち」などと指摘されはしないかといつもビクビクしながら入っている。いつかこんなことを気にせず入れるときがくるといいな、と私は思っている。髪の毛をのばせばこんなことは思わなくなるけど、私はこの髪が気に入っていて、一番自分に自信が持てる。だから、これからも私はこの自分が好きな髪型でいこうと思う。

もし、世の中の皆がこうした考えを持ち実現することができれば、もっとたくさんの女性が住みやすい国になると思う。女性にかぎらず男性も同じ事が言える。別に男性だからと髪を短髪にする必要はない。長くしても良いと思う。女性の短髪は、時にかっこいいと言ってもら

えるが、男性の長髪は受け入れる人が多くない。世の中  
がもっとこういった考えを尊重できるようにするため  
に、まず私が受け入れ、いつか男女問わず多様な性の人  
がもっと住みやすい国にする事が私の夢の一つだ。



# 「好き」と言いたい、 堂々と

中津南高等学校 一年

竹本 弘子

私は、漫画が好きです。漫画が好きで、アイドルなどには興味がない。アニメが好きでドラマは観ない。お金の使い道は大体が漫画関連で、アクセサリーなどを最後に買ったのはいつか、思い出せない。もはや私の原動力のほとんどは漫画ではないかとすら思えてくる。そんな人間です。

私自身は、そんな自分が変わっているとはあまり思いません。好きなものは人それぞれだし、人に迷惑さえかかなければ何を好きでも良い、それが普通。そう思っていました。

小学校五年生のある日、教室で友人が「オタクってき

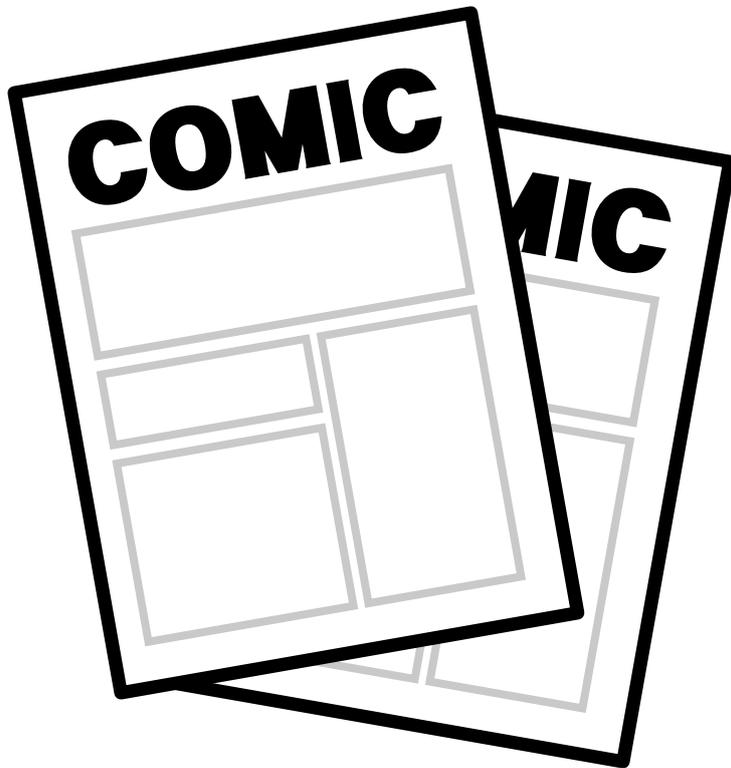
もいよね」と話しているのを聞いたことがありました。その頃には自分がオタクだと思っていた私は、自分の「好き」が否定されたようで、ショックを受けました。

中学生になったある日、「同性愛」という愛の形があることを知りました。私は互いが幸せならそれで良いではないかと思うのですが、ニュースなどで流れるのは、否定の言葉ばかり。肯定の言葉は、殆ど見たことがありません。彼らの幸せが否定されているようで、悲しくなったのを覚えています。

どうして世の中は、誰かの「好き」を否定したがるのでしょうか。言えたとしても、どうして自分の好きなものを「好き」と、堂々と言えない人がいるのでしょうか。言えたとして、どうして肩身の狭い思いをしなくてはならない人がいるのでしょうか。そういった人たちが、果たしていても良いのでしょうか。

高校生になってすぐの頃、「普通それぐらいの年頃の子は」「普通は」「普通は」と、何度も「高校生の平均的な好きなもの」や「平均的な行動」を押し付けられました。けれど、そんなに「普通」が良いですか。自分

が平均的になるために、誰かの「好き」を否定してもいいですか。人は誰もが「好きなものは好き」といえる権利を持っていると私は思います。互いの「好き」を認め、尊重しあえる世になって欲しいと私は切に願います。



# 画面の向こうの人を 傷つけてはいないか

別府鶴見丘高等学校 一年

高茂 愛里

「あんな子だとは思わなかった」「うざすぎる」——これは私が実際にSNS上に書かれた言葉です。私の名前が出されていなかったうえ、かなり仲の良い友だちだったので、初めこの投稿を見たときは「誰のことだろう、話を聞いてあげようかな。」などといった、呑気な気持ちを持っていました。しかし、だんだんと学校での私に対する態度や、LINEの返信が明らかに嫌悪感のあるものに変ったので、私はそこで自分への悪口であると感じました。何か気に障ることをしたのだろうとは思いますが、その子が何に対して腹を立てているのかわ

からず、いまだ関係は回復していません。このことをきっかけに、私はネットでの悪口や人権侵害について考えるようになりました。

近年、ネットでのいじめや誹謗中傷が原因で自ら命を絶つというような事件が多発しています。二〇一八年八月には東京で中学二年生の女子生徒が先輩からネット上で批判され自殺。二〇一九年には群馬の高校二年生の女子生徒が同じくネット上でいじめにより自殺しています。ネット上でのいじめが増えていることの原因として、一つ目に匿名性が高く相手を特定しづらいことが挙げられます。最近では「質問箱」というアプリで、その匿名性を利用し、悪口を書き込むという悪質な行為が多くなっており、実際に私も見たことがあります。二つ目は、気づかないところでのいじめが進行することです。SNSにはグループをつくり、話ができる機能もあるので、本人も知らず知らずのうちに悪口を言われているケースも多いです。三つ目は、証拠が残りにくいことです。投稿は投稿者が自分で消すことができ、さらにインスタやフェイスブックはストーリー機能があり、二十四

時間で投稿は自動的に消えてしまいます。それにより、軽い気持ちで悪口を載せてしまうのです。

いじめをしたり悪口を書き込んだりすることは、SNS上となれば息をするのと同じくらい容易なことになります。しかし、悪気なくつぶやいた、たった一言でも相手にとってはとても大きく、重く鋭いナイフのようなものかもしれません。これらの悪口やいじめをなくし、傷つく人を減らすにはどうすればいいのでしょうか。

まず、親や学校が、しつこいことと悪いことの判別ができるように子どもにきっちり教えることです。これは、ネット上に限ったことではありませんが、小さい頃からネットに触れることが多くなった今、大人が子どもに事の善悪を教えることは絶対条件であると思います。次に、ネット上で何かを発信する際は、まず一度文面を見直し、誰もが嫌な気持ちにならないか確認することが必要です。ネット上では、直接話すよりも感情や意図が伝わりにくく誤解が多く生まれます。それをなくすためにも、文面の再確認は必須です。また、大切なことは直

接話すことです。一つ前にも書いたように、ネット上では本心が伝わりにくいことも多くあります。デリケートな話はネット上ではなく直接話すことも大切です。これら三つのことを一人ひとりが心がけることでネット上でのいじめ、悪口等は格段に減ると考えます。今やネットと人は切っても切れない関係にあります。多くの場面で私たちを助けてくれるネットを利用し、他人を傷つけるための道具にしないよう、社会が変わっていかねばいいなと思います。



# 相手の気持ちを考えること

別府鶴見丘高等学校 二年

若山 楓

私は最近悲しいことがありました。買い物をしにデパートに行った時のことでした。知り合いと買い物に行つてエスカレーターに乗った時、私たちの後ろに障がいをもった男性とその母親が乗ってきました。男性は独り言を喋っていました。その時知り合いの一人が言いまして。

「早く上がって、逃げよう。」

私は何で早くエスカレーターを上らないといけないのか、と聞くと「早く言われました。」

「怖いじゃん、後ろの人。」

私はそのあと「早く早く。」と言われて、結局早くエ

スカレーターを駆け上がってしまいました。エスカレーターの場所から離れようとしてふと後ろを振り向いたら、まだエスカレーターに乗っていた男性の母親の方と目が合いました。とても悲しそう、申し訳なさそうな顔をしていました。私はとても心が痛くなりました。しかし私たちがわざと男性から逃げたことに気がついた母親の方は、私よりももっと悲しい気持ちになったと思います。

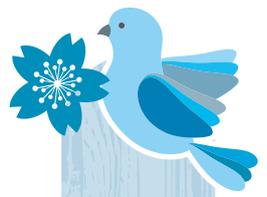
なんであの時私も一緒になって逃げてしまったのか、とても後悔しています。それは私も差別をされた男性やその母親の方の気持ちがわかるからです。

私にも同じように障がいをもった高校生の従妹がいます。私と彼女は小さい頃からよく一緒にいて、ご飯を食べに行ったり買い物に行ったりしています。彼女も独り言が多くよく一人でしゃべっています。私と彼女は会話が続きません。続けることが難しいのです。ですが、彼女の独り言に質問を試みたり相槌をうったりします。すると彼女は嬉しそうな顔をしてくれたり、たまに質問に返してくれたりします。私はそんな彼女とのやり取り

が好きです。私が一方的に話し続けても彼女はいつも聞いてくれます。とても優しく明るい従妹です。従妹と一緒にいるとたまに差別のような言葉を彼女にかける人がいたりします。そんな時言った人は、その場限りで自分が言ったことを忘れるけど、言われた人やその周りにいる人はとても悲しい傷つきます。相手に言い返すことはできなくても自分が何かを言われたことは、伝わっています。

障がいがある、ないの関係なく、差別することはあってはならないことです。差別のような言葉や行動は自分が思っている以上に多くの人を傷つけています。私は今回知り合いに「それがおかしいことだ」と伝えることができませんでした。ですが、今、人権作文を書きながら私がしたこと、従妹が同じようなことになった時の気持ちを改めて考え、次にもし同じようなことがあった時にはきちんとおかしいことであると伝え、少しでも差別のない世界になるようにしたいと思います。





## 身近な人権

別府鶴見丘高等学校 三年

福田 亜理沙

「差別」という言葉を聞くと、多くの人が強い負の印象を抱くと思います。日本人の多くは、差別は悪であり、自分とは無関係なところに存在していると考えているのではないのでしょうか。しかし私は、グローバル化が加速している現代だからこそ、日本人の心に無意識のうちに根づいている「差別」の芽に目を向けるべきであると考えています。

私は幼少期、家族の仕事の都合で海外で数年間生活を送りました。その経験のおかげで、今では胸を張って、「自分は二つの文化を知っている」と言えることができます。しかし、海外経験を自分の強みとして受け入れることは簡単ではありませんでした。海外では現地校に通い、現

地の生徒と共に学校生活を送っていました。ですが、常に、容姿や言語や文化の違いから、自分が外国人であるという意識は心のどこかで持っていました。ただ、現地の友だちは、私を特別扱いすることなく、仲間として認めてくれていたおかげで、私は違和感なく生活することができていました。日本に帰国後は、クラスの全員が日本人という環境で、海外を恋しく思いつつも、安心感を覚えました。

しかし、いざ学校生活が始まると、同じ日本人であるのに、「帰国子女」に対して、「日本文化について無知」、「英語を自由に使える」などといった固定観念を持たれていると感じました。実際には、住んでいた国や期間、その人の性格によって様々であり、「帰国子女」とひとくくりにはできません。海外経験があるというだけで、「帰国子女」というレッテルを貼られると、どうしても偏見で見られてしまうため、私は自分の海外経験や英語力を隠すようになりました。しかし、ほとんどの日本人の友だちは、仲が深まれば深まる程、私のバックグラウンドについて興味を示し、理解を示してくれたため、違和

感を抱くことも減っていきました。

私は、この経験から、日本特有の空気を読み、集団の和を大切にするという国民性を意識するようになりました。この国民性があるからこそ、日本人はチームワークに優れているし、帰国子女や外国人などを自分たちとは異なる存在として、無意識に捉えてしまうのだと考えます。グローバル化の加速に伴い、多様なバックグラウンドを持つ人々が共生可能な場所に日本がなってほしいと考えています。そのためには、異質なものに対して無意識のうちに偏見をもってしまいがちな日本人の国民性に沿った人権教育を、早い段階から始めるべきだと思えます。まずは、隣に座っている友だちと自分の違いに気づき、共感したり、新しい価値観を学んだりすることで、十人十色であるということを生徒自身で体験してほしいです。

さらに世界へ目を向け、生徒の視野を広げることで、多様な価値観に対して寛容な姿勢を身につけることができれば、日本が、誰にとっても住みよい場所になるのではないのでしょうか。私はこれからも、自分の経験を基に、

身近な人権について考えを深め、発信していきたいです。



## あとがき

この人権作文集「ひかり」は、本来子どもたちとともに考えあつていくことを目的に編集され、日常的に活用されることを期待して作成されました。

子どもたちをとりまく社会が、ますます厳しくなっている現実があります。その社会の中で、子どもたちが、様々なことを感じたり、新しい気づきを生み出したりして、自分の言葉で綴っています。その思いを受けとめてほしいと思います。たくさん子どもたちがこの作文集と出会うことを願っています。

また、教職員自身も子どもたちの思いを知り、日常の生活の中で、具体的な事実を通して、様々な矛盾や不合理、差別を見抜き、憤り、これから解決しようとする子どもたちの姿に学んでいた

きたいと思います。

残念ながら、推薦された作品のすべてを掲載することはできませんでしたが、作文に取り組んだ子どもたちや、その指導に当たられた教職員、選定いただいた各地の担当者や編集委員など、多くの方々に厚くお礼申し上げます。

二〇二〇年三月

公益社団法人大分県人権教育研究協議会